

ピエロ・デッラ・フランチェスカ作《聖十字架物語》再考

——コンスタンティヌス帝に付与された新たなイメージ——

長 沢 朝 代

はじめに

ピエロ・デッラ・フランチェスカによる《聖十字架物語》(図1)は、トスカーナ地方の町アレツツォの、サン・フランチェスコ聖堂主礼拝堂壁面に描かれたフレスコ画である。「聖十字架物語」とは、キリストがその上で磔に処された十字架にまつわる伝承で、主たる文学的源泉は十三世紀にヤコブス・デ・ヴォラギネにより編纂された『黄金伝説』の中の「聖十字架の発見」と「聖十字架称賛」という二つの祝日に関する物語である。^[1]この礼拝堂装飾のバトロンはアレツツォの薬種商バッチ家で、フィレンツェに工房を構えていたピッチ・デイ・ロレンツォによって一四四七年頃から制作が開始された。この画家は勝利門壁面やヴォールトにフレスコ画を描いた後一四五二年に病のために没し、この後を引き継いだのがピエロ・デッラ・フランチェスカであった。この壁画制作に関する契約書は残っていないため、ピエロが制作に携わった正確な時期は確定できず、前任の

画家が没した一四五二年を上限に、一四六六年にピエロが交わした別の仕事の契約書に、ピエロが《聖十字架物語》を描いた画家と記されていることからこの年が下限とされている。

ピエロによる《聖十字架物語》壁画は、十四世紀末にフィレンツェのサンタ・クロッチェ聖堂にアーニョロ・ガッデイの描いた同主題

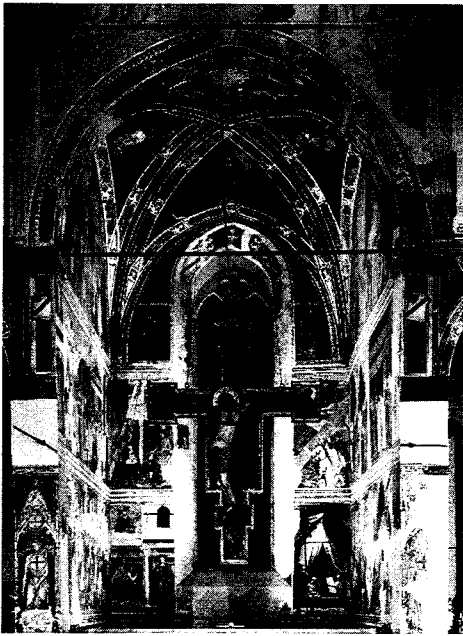


図1 ピエロ・デッラ・フランチェスカ
《聖十字架物語》全景 アレツツォ
サン・フランチェスコ聖堂 主礼拝堂

の壁画が手本とされた。トスカーナ地方では同じくガッディ作を参考にした《聖十字架物語》壁画がヴォルテッラとエンポリでそれぞれ一四一〇年頃と一四二四年頃に描かれている。しかしピエロの壁画には、これらの先行する《聖十字架物語》壁画には取り上げられることなかった場面がいくつか挿入されている(表1)。先行研究では特に「シバの女王とソロモン王の会見」とコンスタンティヌス帝の二つのエピソードを当時の出来事と関連付け、本稿で中心的

	フィンツェ 1380年代末	ヴォルテッラ 1410年頃	エンポリ 1424年頃	アレツォ 1452-66年
アダム之死	○	○	?	○
シバの女王の聖木礼拝	○	○	○	○
シバの女王とソロモン王の会見				●
聖木を埋める	○	○	○	○
池からの聖木の引き上げ	○	○	○	
十字架作り	○	○	○	
コンスタンティヌス帝の夢				●
コンスタンティヌス帝の戦い				●
ヘレナのユダへの審問			○	
ユダの井戸からの引き上げ				●
聖十字架の発見	○	○	○	○
聖十字架の検証	○	○	○	○
ヘレナによる聖十字架の返還	○	○	○	
ヘラクリウス帝の夢	○	○	○	
聖十字架を盗むホスロー	○	○	?	
ヘラクリウス帝の戦い	○	○	?	○
玉座のホスロー	○	○	○	
ホスローの処刑	○	○	○	○
ヘラクリウス帝による聖十字架の返還	○	○	○	○
受胎告知				●

表1 場面比較

●: アレツォのみ
●: 歴史的イベントとの関連から解釈される場面



図2 ピエロ・デッラ・フランチェスカ 《聖十字架物語》「コンスタンティヌス帝の戦い」

に論究する「コンスタンティヌス帝の戦い」(図2)については多くの研究者によりオスマン・トルコとの戦いを暗示し、十字軍を喚起する役割を担っていたとする解釈が提出されている。これら先行研究を踏まえ、稿者も「コンスタンティヌス帝の戦い」は十字軍のプロバガンダとしての役割を担っているという解釈に異論はない。しかしそれではどのようにして、以前には描かれることのなかった「コンスタンティヌス帝の戦い」の場面は十字軍のプロバガンダとしての役割を持ち得たのであろうか。先行研究ではこの点について言及されてはこなかった。アレツツォ以前、トスカーナ地方の壁画にコンスタンティヌス帝が描かれなかったことは、表1の通りであるが、写本などに「聖十字架物語」の挿絵が描かれる場合でも、コンスタンティヌス帝が描かれた作例はほとんどない³⁾。一方コンスタンティヌス帝は「聖十字架物語」とは別の文脈「聖シルウェステル伝」の中では、主要な人物として描かれているのである。

本稿ではアレツツォ以前にコンスタンティヌス帝が描かれた文脈の違いに着目し、アレツツォの《聖十字架物語》壁画に「コンスタンティヌス帝の戦い」場面が挿入された契機は、コンスタンティヌス帝の伝説の典拠がそれまで知られていた「聖シルウェステル伝」とは別の文学的典拠、エウセビオスの著作で語られるコンスタンティヌス帝像の広まりにあったとの仮説を提示する。この新たな文学的典拠に記述されるコンスタンティヌス帝を描くことで、ピエロの「コンスタンティヌス帝の戦い」場面がオスマン・トルコとの戦い

を暗示すると同時に、アレツツォの《聖十字架物語》壁画に十字軍のプロバガンダとしての役割を付与することが可能であったとの結論に導きたい。

1、「コンスタンティヌス帝の戦い」場面

初めに「コンスタンティヌス帝の戦い」を見てみよう。中央の蛇行する川をはさんで、左側にはコンスタンティヌス帝とその軍隊、右側には敵軍が描かれている。コンスタンティヌス帝は甲冑を付けずに白馬に乗って先頭に立ち、右手で小さな十字のしるしを敵に掲げて進む。左側のコンスタンティヌス帝の兵士たちが持つ槍はほぼまっすぐと伸びているのに対し、右側の兵士たちの槍と旗の柄の向きには乱れが見られ、慌てて逃げていく様子が表れている。こうした混乱とは対照的に川の水面には周囲の風景が映り、水鳥が静かに泳ぐ様子からは静けさが伝わってくる。

『黄金伝説』中の「聖十字架の発見」で語られるコンスタンティヌス帝の戦いには二つのヴァージョンがある。一つはドナウ河畔での蛮族との戦い、もう一つは三二二年のローマのミルヴィウス橋におけるマクセンティウスとの戦いである。どちらの場合にも戦いの前後、空に十字のしるしが現れ、このしるしによって勝利せよという言葉が告げられる。ドナウ河畔での蛮族との戦いの記述では、コンスタンティヌス帝は空に現れた十字のしるしを先頭に押し立てて

意気軒昂として敵に向かって馬を駆る。すると敵兵はことごとく背を見せて敗走し、大勢が殺されたと記されている。一方ミルヴィウス橋での戦いのヴァージョンでは、十字のしるしを空に見た後のコンスタンティヌス帝の姿を次のように記している。

(コンスタンティヌス帝は)軍旗のかわりに十字架をかかげさせ、みずから十字架を手にとった。それから、天を仰いで、神聖な十字架のしるしで武装しているわたしの右手がローマ人の血でよごれることがありますように、そして、無血の勝利を得させてくださいますように、と神に祈った。⁵³⁾

() (内は引用者)

この後、敵であるマクセンティウスはコンスタンティヌス帝が川に近づくのを見て気がはやり、自分が畏として仕掛けた見せかけの橋のことを忘れてしまい、自らこの畏にはまって溺死した、と続く。実際に戦う様子が描かれず、コンスタンティヌス帝は右手で十字架を敵に掲げていることから、ピエロの「コンスタンティヌス帝の戦い」は二つの川辺での戦いのうち、多くの研究者が認めるようにミルヴィウス橋におけるマクセンティウスとの戦いを描写していることは明らかである。

もとより『黄金伝説』は十四、十五世紀の人々に良く知られた聖人伝であり、アーニョロ・ガッディもサンタ・クロッチェ聖堂の壁

面制作の際には、主要な文学的源泉としている。⁵⁴⁾ところがガッディの壁画にも、そしてガッディを手本として制作されたヴォルテッラとエンポリの《聖十字架物語》壁画にも、これらコンスタンティヌス帝の戦いのエピソードは描かれなかったのである。

2、時代背景と先行研究

さて多くの先行研究がピエロの《聖十字架物語》壁画と結び付ける当時の出来事とは次のようなものであった。

十五世紀初頭、オスマン・トルコによる脅威にさらされていたビザンティン帝国の皇帝とビザンティン教会は、この危機を克服するために西方カトリック教会と同盟し、援助を要請する以外に道はないと考えた。そこで東西両教会の再統一をローマ教皇庁へもちかけ、一四三八年から三十九年にフェッラーラとフィレンツェでそのための公会議が開かれた。公会議の結果東西教会は一時的にしる合意に至り、ローマ教皇は約束どおりビザンティン帝国を救うために十字軍を派遣する。しかし一四五三年、コンスタンティノープルはオスマン・トルコ軍によって陥落する。コンスタンティノープル陥落後も教皇たちは、新たな十字軍派遣を計画し、それによってコンスタンティノープルを奪還して聖地エルサレムを取り戻す足掛かりにしようとした。一四五六年の六月と七月には、フランチェスコ会修道士ジョヴァンニ・ダ・カペストラノ率いる十字軍が、ドナウ河畔で

オスマン・トルコ軍に勝利する。その後も一四五九年と六三年には、教皇ピウス二世が新たな十字軍を召集する。こうした一連の出来事は事実、ピエロの壁画制作の時期と想定される一四五二年から六六年に重なるのである。ライトボウンは「コンスタンティヌス帝の戦い」場面がそこに挿入された理由として、この時期フランチェスコ修道会が教皇から十字軍派遣を喚起する説教を課されていたことを指摘し、十字軍のプロパガンダとしてこの場面が描かれたと推察している。より具体的な歴史的事件と結び付けて解釈を行うのはカルヴェージで、「コンスタンティヌス帝の戦い」と、これに対面して描かれた「ヘラクリウス帝の戦い」の二つの戦闘場面は、一四五六年のフランチェスコ会修道士カペストラノが率いる十字軍の二度の勝利を暗示していると解釈している。⁵⁰

二つの戦闘場面が、カペストラノ率いる十字軍の二度の勝利を暗示するというカルヴェージの説は、本稿第5節で述べるピウス二世の説教と関連付けたものである。しかしこれらを結びつける資料はないため、この解釈が妥当なものであるかどうか判断することはできない。一方ライトボウンの推察については、フランチェスコ修道会は確かに教皇からの要請によって十字軍を唱道する説教を行っており、また十字軍派遣は十五世紀の教皇たちにとって重要な課題であり続けたことから、稿者もライトボウンにならってピエロの同場面は、十字軍のプロパガンダとして描かれたという立場を踏襲したい。しかしこのことは、「コンスタンティヌス帝の戦い」場面がなぜ十

字軍のプロパガンダとなり得たのかという問いへの答えにはならないのである。つまりアレツォ以前、一聖シルウェステル伝一の中に描かれた十字軍のプロパガンダとしての役割を持たなかったコンスタティヌス帝が、その役割を担うためには、同皇帝に対するイメージの転換が起らなければならないと稿者は考えるのである。

3、アレツォ以前の《聖十字架物語》と

コンスタンティヌス帝のイメージ

本節ではアレツォ以前のコンスタンティヌス帝が、どのような文脈で描かれていたのか図像学的に考察する。

表1で確認したように、アレツォ以前に描かれた《聖十字架物語》壁画にはコンスタンティヌス帝ではなく、もう一人の皇帝ヘラクリウスが描かれるのが慣例であったと考えられる。⁵¹ヘラクリウス帝は『黄金伝説』の「聖十字架称赞」の中で、ペルシア王に奪われた聖十字架を取り戻した皇帝として登場する。このエピソードによって、ヘラクリウス帝の戦いは最初の十字軍とみなされ、十字軍の必要性が説かれたときには中心的役割を担った。⁵²「聖十字架物語」が描かれる際、ヘラクリウス帝ときには十字軍を唱道する人物として、ときには終末論と結び付けて表現された。⁵³一方アレツォ以前、壁画に限らず写本に「聖十字架物語」が描かれる場合にも、ヘラクリウス帝と比べればコンスタンティヌス帝はほとんど登場しないのである。⁵⁴

ところが「聖十字架物語」の中にはほとんど描かれることのないコンスタンティヌス帝は、別の物語「聖シルウェステル伝」の中では中心的な人物として登場する。「聖シルウェステル伝」とは五世紀末に教皇庁で作られた伝説で、次のような物語である。

病にかかったコンスタンティヌス帝は神官から、三千人の子どもの血で湯浴みすることを助言される。入浴の用意がすすめられる中、嘆き悲しむ母親たちの姿を見た皇帝は憐れみを覚えこれを思い留まる。その夜コンスタンティヌス帝の夢の中に聖ペテロと聖パウロの二人の聖人が現われ、ローマ司教つまり教皇であるシルウェステルから洗礼を受けることで病は癒えるだろうと告げられる。その通りに実行すると(図3)コンスタンティヌス帝の病は癒えた。この伝説が元となって「コンスタンティヌスの寄進状」という偽書が作られる。それによれば皇帝はシルウェステルに、難病平癒のお礼として他のすべての司教たちに対する首位と西方世界における皇帝権を与え、イタリア全地方と西方世界を教皇に譲り、自分はコンスタンティノーブルへ隠退すると告げる(図4)。つまりこの伝説によって教皇は、聖ペテロの後継者であると同時に、西方世界における皇帝の後継者として世俗権力に対しても首位を主張することが可能になるのである。作例として挙げた図3〜図4は十三世紀にローマのクアットロ・コ罗纳ーティ聖堂に描かれたフレスコ画《聖シルウェステル伝》で、この壁画は教皇権が皇帝権に優ることを主張するために描かれたことが指摘されている。アーニョロ・ガッディの

《聖十字架物語》壁画が描かれたフィレンツェのサンタ・クロッチェ聖堂バルデイ礼拝堂にも、一三四〇年頃制作の《聖シルウェステル伝》が描かれている(図5)。表1で確認したように、ガッディの《聖十字架物語》にはコンスタンティヌス帝は登場していなかった。その意味では同じ聖堂内に描かれた壁画《聖十字架物語》と《聖シルウェステル伝》に即して言えば、アレツツォの壁画以前にコンスタンティヌス帝が登場するのは《聖十字架物語》ではなく、《聖シルウェステル伝》であった。

もう一つの作例は、一見「聖十字架物語」のように見え、実は「聖シルウェステル伝」の文脈が表れた《スタヴローの三連板》(図6)である。これは十字架の断片を納めるための三連板で、十二世紀にスタヴロー大修道院長によって注文されたと言われる。右側に聖ヘレナに関するエピソードが三場面、そして左側には「コンスタンティヌス帝の洗礼」に加えて、アレツツォ以前の《聖十字架物語》には取り上げられなかった「コンスタンティヌス帝の夢」と「コンスタンティヌス帝の戦い」が描かれている。「戦い」場面(図7)にはCONSTANTIN VICTOR et MAXENTIIという銘が付され、ミルヴィウス橋の戦いであることがわかる。一見『黄金伝説』中の「聖十字架の発見」の物語を描いているような《スタヴローの三連板》とはいえ、「洗礼」(図8)の場面では、SILVESTER PAPA(シルウェステル教皇)という銘が記されており、このコンスタンティヌス帝は、「聖シルウェステル伝」の文脈に即していることに



図3 《聖シルヴェステル伝》
「コンスタンティヌス帝の洗礼」ローマ
クアットロ・コロナーティ聖堂 1243-54年頃

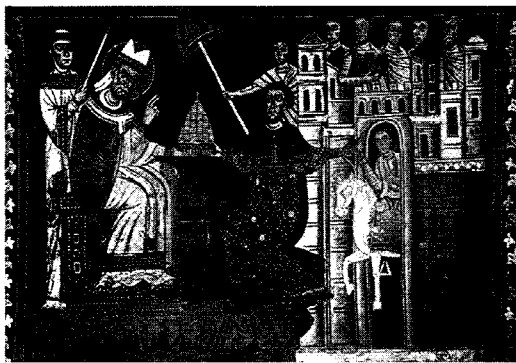


図4 《聖シルヴェステル伝》
「コンスタンティヌス帝の贈与」



図5 マーゾ・ディ・バンコ《聖シルヴェステル伝》
「聖シルヴェステルの話を聞くコンスタンティヌス帝」および「コンスタンティヌス帝の洗礼」フィ
レンツェ サンタ・クロッチェ聖堂 1340年頃

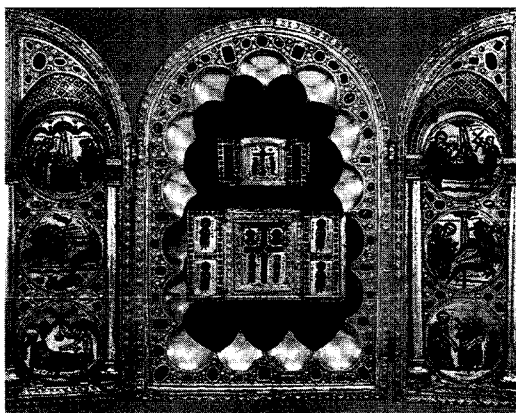


図6 《スタヴローの三連板》
モーガン・ライブラリー 1256-58年頃



図7 《スタヴローの三連板》部分
「コンスタンティヌス帝の戦い」



図8 《スタヴローの三連板》部分
「コンスタンティヌス帝の洗礼」

気づくのである。例えば母后である聖ヘレナは常に王冠をかぶり、**REGINA**（女王）という称号がしるされているのに対し、コンスタンティヌス帝は王冠をかぶらない姿で描かれ、**REX**（王）という称号も記されず、王権は軽視された姿で描かれている。つまり聖シルウェステルの手で洗礼を授かるコンスタンティヌス帝は、「コンスタンティヌスの寄進状」を想起させ、教皇に対して西方世界における世俗権力を譲った存在としての姿を強調するイメージになる。

《スタヴローの三連板》は制作当時の世俗権力と教皇庁の対立が表れていることは先行研究でも指摘されている。こうして《スタヴローの三連板》は「聖十字架物語」を取り上げながらも、ここに登場するコンスタンティヌス帝の性格は、「聖シルウェステル伝」で語られる同皇帝であると言えるだろう。以上のようにアレツォの壁画以前のコンスタンティヌス帝は、「聖十字架物語」の文脈ではなく、「聖シルウェステル伝」の文脈において取り上げられてきた。つまりコンスタンティヌス帝は、教皇に西方世界を委ねた皇帝であり、ローマ教皇が世俗権力や他の対立する勢力に対し、その首位性を正当化するための存在として描かれていたと推察できるだろう。

4、コンスタンティヌス帝に

新たなイメージが付与された契機

聖シルウェステルと共に語られる存在であったコンスタンティヌス帝が、アレツォの《聖十字架物語》において取り上げられるた

めには、コンスタンティヌス帝に対する同時代人の評価の転換、つまりイメージの転換が起こらねばならなかったであろう。稿者はその契機を十五世紀初頭に始まるローマの整備復興の際に行われた古代建築物の修復を通して、古代の皇帝たちのイメージに変化が起きたこと、より具体的には人文主義者による古代の文献研究によってそれまで知られていなかったコンスタンティヌス帝の伝記が知られるようになったことと推察する。

十五世紀初頭ローマ教会は大分裂を経て、ただ一人の教皇として選出されたマルティヌス五世が一四二〇年によりやくローマへ戻った。ローマへ戻った教皇がまず着手しなければならなかったのは、長期間の教皇庁不在のために荒れ果てていた都市ローマの整備復興であった。教会大分裂後、一応の落ち着きは取り戻したものの、ローマ教皇庁は対立勢力であるフランス人聖職者や世俗権力に対してその尊厳を高める必要がある、そのためローマの街をキリスト教世界の中心地に相応しく整備しなければならなかった。しかし時間と財源に余裕がなかったため、新たな建造物を建てるのではなく既存の建造物の修復が行われた。修復された建造物にはパンテオンやサン・ピエトロ旧聖堂などが含まれており、これらの古代建築物の修復は初期キリスト教時代の古代ローマを思い起こさせることになった。また中世においては、古代の皇帝たちはキリスト教徒を迫害し、聖ペテロの処刑を行った悪魔的な存在として考えられていたが、ローマ市街の修復を通して古代の皇帝たちは偉大な建設者としてみなさ

れるようになる。特に《コンスタンティヌスの凱旋門》は古代ローマ最大の凱旋門で、神の導きによるミルヴィウス橋での勝利を記念して建造されたものであった。かくしてコンスタンティヌス帝は十五世紀中葉、初のキリスト教徒の皇帝として再びその権威を教会のために行使した模範を示す存在となったのである。²⁵

古代建築物の修復は、初期キリスト教のラテン教父、さらにはギリシア教父に対する興味をひき起こす契機にもなっていくが、その先駆となったのはフィレンツェの人文主義者、アンブロジー・トラヴェルサリーであった。²⁶ 彼はカマルドリ修道会総長で、エウゲニウス四世の側近でもあった。古代のキリスト教教父やギリシア語のキリスト教文献は、中世を通じてラテン語訳で読まれていたが、トラヴェルサリーはこれらの原典に直接あたり、ギリシア語の表現を復元してそれまでの解釈を修正して翻訳を行った。このときギリシア語原典で読まれた著作の中に、コンスタンティヌス帝の伝記を著したエウセビオスの著作も含まれていたのである。²⁷ それまでラテン語で読まれていたエウセビオスの『教会史』が、ギリシア語で読まれるようになったことは、トラヴェルサリーが友人へ宛てた一四二四年の手紙から知ることができる。

この十日ほど、カエサレアのエウセビオスの『教会史』をギリシア語で読んでいて、あなたへ手紙を書くことができなかつた。いかにこの著作が私を魅了したか、それは信じがたいほど

だ。私は以前この著作をラテン語で読んではいしたが、原語で読む方がより喜びをもたらしてくれた。²⁸

エウセビオスはコンスタンティヌス帝と同時代の司教で、「教会史の父」といわれるほど多くの歴史関係の著作を残している。エウセビオスによるコンスタンティヌス帝の伝記には『コンスタンティヌスの生涯』と『教会史』の二冊があり、この中にコンスタンティヌス帝の戦いの場面や、戦いの前夜十字架の幻を見たことが記されている。『コンスタンティヌスの生涯』が、ラテン語に翻訳されるのは一五〇〇年代半ばのことで、中世には普及していなかった。²⁹ また『教会史』のラテン語訳は、中世を通じて読まれていたにもかかわらず、西方ではエウセビオスの語るコンスタンティヌス帝の伝記は広まっていなかったことが指摘されている。³⁰ 中世の西方世界に広まっていたコンスタンティヌス帝は、聖シルウェステルと共に語られる西方教会の政治的役割を担ったコンスタンティヌス帝のイメージであった。³¹

しかしコンスタンティヌス帝の伝記の文学的源泉に変化が起きたことが、教皇庁に勤めていた人文主義者マッフェオ・ヴェギオの著作『ローマの有名なサン・ピエトロ聖堂の歴史』に記されている。これは一四五五〜五八年頃、巡礼のためのガイドブックとして書かれ、ヴェギオはこの中で歴史家の立場から、明らかな作り話を疑いもなく信じる人々を非難している。その例として挙げるのがコンス

タンティヌス帝に関する二つの源泉、一聖シルウェステル伝一とエウセビオスの『教会史』である。

キリスト教の聖職者が、コンスタンティヌス帝は病を癒すために改宗したのだと信じることは、古代の真の言葉を理解することができない無学な文法学者が、それ以前には存在しなかった新たな表現を代替として創り出す行為のようなものだ。

そしてヴェギオはエウセビオスの著作『教会史』を引用し、コンスタンティヌス帝の改宗はミルヴィウス橋の戦いの前後に、十字のしるしを見たためであると述べている。つまりヴェギオの著作からは、一四五〇年代半ばにはエウセビオスの記すコンスタンティヌス帝がすでに知られるようになっていたことが理解されるのである。アレツツォ以前に「聖シルウェステル伝」でしか語られていなかったコンスタンティヌス帝は、一四五〇年代にはエウセビオスの伝記で語られる、十字のしるしによって勝利したコンスタンティヌス帝という新たな皇帝像を付与とされていることが指摘できるのである。

5、エウセビオスの伝記の中のコンスタンティヌス帝

ではエウセビオスによる伝記の中で、コンスタンティヌス帝はどのように語られているのだろうか。『コンスタンティヌスの生涯』

と『教会史』はほぼ同じ内容が記され、共にコンスタンティヌス帝とモーセを比喩的に語っている。ミルヴィウス橋の戦い場面は、コンスタンティヌス帝が空に現れた十字のしるしを作らせて、これを護符として戦いに臨んだことを語り、次のように続けている。

「主はファラオーの戦車とその軍勢を海に投げ込んだ。ファラオーの選り抜きの騎手や指揮官たちは紅海に呑み込まれ、大海が彼らをおおった一が、それと同じように、マクセンティウスや、武装兵、衛兵なども、二石のように水底に沈んで行った一のである。」

ここでエウセビオスは、敵であるマクセンティウスが自ら仕掛けた畏にはまって川底に沈みコンスタンティヌス帝が戦わずして勝利したことを、旧約聖書中のモーセの紅海渡渉場面を引用することで、両者の勝利を比喩的に語っている。これによってコンスタンティヌス帝の勝利は武力によるものではなく、十字のしるしによるものであることが強調されることになる。そしてエウセビオスはミルヴィウス橋で勝利したコンスタンティヌス帝の言葉として、次のように記している。

彼（コンスタンティヌス帝）はただちに、自分の像の手に、救い主の受難の記念物「十字架」をもたせるように命じた。そ

して(…)以下の碑文をラテン語で刻ませた。「予は、勇気の真の証であるこの有益な徴「十字架」によって、諸君の都を暴君の軛から救って解放した。さらに、予は元老院とローマ市民を自由にし、往時の名声と光輝を取り戻した。」¹⁵⁾

() (内引用者)

ここで記述されるコンスタンティヌス帝は、十字のしるしによって異教徒に勝利し、ローマ市民を異教徒から解放した救済者としての皇帝の姿である。実際に戦う場面が描かれず十字のしるしを掲げているピエロの描いたコンスタンティヌス帝の姿から、ほとんどの先行研究では「コンスタンティヌス帝の戦い」場面をミルヴィウス橋におけるマクセンティウスとの戦いとしてみなしてきた。しかし稿者はピエロのこの場面は単に『黄金伝説』中の二つの戦いのうち、どちらか一つを選んで描いたのではなく、エウセビオスの語るコンスタンティヌス帝を描いていると考える。エウセビオスの語るコンスタンティヌス帝、つまり十字のしるしによって勝利し、人々を異教徒から解放した救済者としての皇帝である。エウセビオスの伝記で語られる、この皇帝像が広まっていたことが前提にあつてこそ、コンスタンティヌス帝は十字軍のプロバガンダとして機能したと言えるだろう。

十字のしるしによって勝利したコンスタンティヌス帝への言及は、一四五九年に教皇ピウス二世が十字軍を招集した際に行った説教の

中に表れる。

対立する敵トルコ軍を打ち負かしたのは、武器によるというよりは信仰によるものであった。(…)新たな勝利にはすばらしい先例があつた。戦いを不安に思つたコンスタンティヌス大帝に、空に十字のしるしが現れて神の声が告げるのを聞いた。「このしるしを持って勝利せよ。」¹⁶⁾

() (内引用者)

ここで述べられる「新たな勝利」とは、一四五六年のフランチェスコ会修道士ジョヴァンニ・ダ・カペストラノが率いた十字軍の勝利を指し、ピウス二世はコンスタンティヌス帝の十字のしるしによる勝利と同時代の十字軍の勝利を重ねて語っているのである。ピウス二世の言葉から、一四五〇年代末にはコンスタンティヌス帝が十字軍のプロバガンダとしての機能を持っていたことがうかがえるのである。

結 び

本稿ではピエロ以前の《聖十字架物語》壁画に描かれることになった「コンスタンティヌス帝の戦い」場面が、なぜ、どのようにして十字軍のプロバガンダとしての役割を持ち得たのか、という問題について論じた。稿者は、その理由をコンスタンティヌス帝像の

文学的源泉が実は、「聖シルウエステル伝」からエウセビオスの『教会史』への転換にあったのではないか、との可能性を提示した。

アレツツォの壁画にコンスタンティヌス帝が描かれる以前、同皇帝は「聖シルウエステル伝」と共に語られ、教皇の世俗権力に対する首位性を主張するための存在であった。しかし十五世紀初頭、トラヴェルサリに始まるギリシア語原典研究の高まりと共に、エウセビオスの『教会史』の中で語られるコンスタンティヌス帝の伝記が西方世界で知られるようになったと考えられる。それに伴い、病平癒のために聖シルウエステルから洗礼を受けキリスト教へ改宗したという皇帝像から、十字のしるしによって勝利し、人々を異教徒から解放した救済者としてのコンスタンティヌス帝像が認識されるようになったのである。この転換は一四五〇年代のマッフェオ・ヴェギオによる著作に表れている。また教皇も同時代のオスマン・トルコ軍に対する勝利とコンスタンティヌス帝の十字のしるしによる勝利を重ねて語るようになるのである。

ビエロがアレツツォに「コンスタンティヌス帝の戦い」を描いた時期、コンスタンティヌス帝の建設した都コンスタンティノープルはオスマン・トルコ軍によって陥落し、その後もビザンティン帝国の領土であった地を侵攻し続けた。エウセビオスの語るコンスタンティヌス帝像が広まっていたことが前提にあって始めて、ビエロの描いたコンスタンティヌス帝は、当時脅威にさらされていた東方のキリスト教徒をオスマン・トルコという異教徒から解放する、十字

軍のプロバガンダとして機能することが可能であったと言えるだろう。

注

- (1) 本稿では『黄金伝説』の中に含まれる「聖十字架の発見」と「聖十字架称賛」の二つの祝日の物語をまとめて「聖十字架物語」と称する。
- (2) Lighthouse, R., *Pieno della Prunescu*, New York, 1992, p.123; Brent, B., *A Heritage of Holy Wood. The Legend of the True Cross in Text and Image*, Leiden, 2004, p.378.
- (3) 十一世紀半ばから十二世紀初めにかけて北イタリアのバルドリーノにあるサン・セヴェロ聖堂の壁画（金沢百枝『ロマネスクの宇宙 ジローナの《天地創造の刺繍布》を読む』東京大学出版会、二〇〇八年、二二一頁）や、一四二五年頃のマルケ州モンテジョルジョのサン・フランチェスコ聖堂ファルフェンセ礼拝堂天井 (Brent, op. cit., pp.388-389) には、「コンスタンティヌス帝の夢」と「戦い」と思われる場面が描かれている。コンスタンティヌス帝のエピソードはまったく描かれなかったわけではないが、物語に登場するもう一人の皇帝ヘラクリウスに比べ、描かれた作例は非常に少ない。なおビザンティン圏においてコンスタンティヌス帝は列聖されており、同皇帝に対する扱いは西方世界と異なるため、本稿ではビザンティン圏の図像については対象としない。
- (4) 「コンスタンティヌス帝の戦い」場面は現在剥落が激しいが、十九世紀前半にヨハン・アントン・ランプーの描いた水彩画（デュッセルドルフ美術館蔵）によって、全体像をうかがい知ることができる。
- (5) ヤコプス・デ・ヴォラギネ『聖十字架の発見』『黄金伝説?』前田敬作他訳、平凡社ライブラリー、二〇〇六年、二〇二頁。

(9) Cole, B., *Arnolfo Gaddi*, New York, 1977, p.80.

(7) Lighthown, *op. cit.*, p.124.

(8) Calvesi, M., *Piero della Francesca*, Milano, 1998, p.41.

(9) Pastor, L., *The History of the Popes, From the Close the Middle Ages*, vol.II, London, 1923, pp.382-384; Seltun, K. M., *The Papacy and the Levant (1204-1571)*, vol.II, Philadelphia, 1978, p.208, n.33.

(10) Coppa, F. J. (ed.), *The Great Popes through History: An Encyclopedia*, vol.1, London, 2002, p.252.

(11) Lavin, M. A., *The Place of Narrative: Mural Decoration in Italian Churches, 431-1600*, Chicago, 1990, p.105. レイヴァンは「典礼の中で聖十字架物語が語られる際、コンスタンティヌス帝のモネードは消え、聖クレナト・トラクリウス帝が語られることが伝統となっており、ガッチャの壁画はその伝統に則って描かれた。コンスタンティヌス帝が描かれていない理由は様々である。

(12) Bact, *op. cit.*, p.164.

(13) *ibid.*, pp.152-153; Drivers, J. W., "Heracius and the *Resstitutio Crucis*, Notes on Symbolism and Ideology," in Reinink, G. J. (eds.), *The Reign of Heracius (610-641): Crisis and Confrontation*, Leuven, 2002, p.187.

(14) 例えば、ゴスティアのサン・フランチェスコ聖堂の壁画には「十字架降下」と共に「トラクリウス帝の聖十字架返還」の場面が描かれている。またウルビーノのサン・ドメニコ聖堂のアプシスには「クレナトによる聖十字架の発見」と「トラクリウス帝の聖十字架返還」が並べて描かれていた（現在はアルバーニ教区博物館所蔵）。

(15) ヤコブス・デ・ヴォラギネ「聖シルヴェステル」『黄金伝説』前田敬作他訳、平凡社ライブラリー、二〇〇六年、一八五—一八七頁。

(16) タビッド・ノウルズ他『キリスト教史』中世キリスト教の発展』上巻 大学中世思想研究所編訳／監修、平凡社ライブラリー、二〇〇八年、一五

九—一六〇頁。

(17) Walter, C., *The Iconography of Constantine the Great: Emperor and Saint with Associated Studies*, Leiden, 2006, p.60.

(18) ガッチャの『聖十字架物語』壁画には、コンスタンティヌス帝が登場しているが、同じ大聖堂内のステファン・ラスティッチ「聖クレナト・コンスタンティヌス帝が表れたこと」Thompson, N. M., "The Franciscan and True Cross: The Decoration of the Cappella Maggiore of Santa Croce in Florence," in *Gesta*, 2004, p.71. このほか、この「聖十字架物語」の中で、コンスタンティヌス帝を含むことが慣例となっていたと推定される。

(19) 現在のベルギーにある「大修道院」The Pierpont Morgan Library, *The Slavetel Triptych: Mosan Art and the Legend of the True Cross*, New York, 1980, p.11.

(20) *ibid.*, p.15.

(21) *ibid.*, p.15.

(22) 中田園「法王庁・コロッセウム復興 (Restauratio Romae) 盛期ルネッサンス美術の舞台を準備した十五世紀の法王たち」国立西洋美術館編集『ヴァチカン美術館特別展』日本テレビ放送網、一九八九年、三二—四三頁。

(23) Stinger, C. L., *The Renaissance in Rome*, Bloomington and Indianapolis, 1998, p.227.

(24) *ibid.*, p.247.

(25) *ibid.*, p.248.

(26) Stinger, C. L., *Humanist and the Church Fathers: Ambrogio Traversari and Christian Antiquity in the Italian Renaissance*, New York, 1977, pp.137-138.

(27) ニッコロ・ニコロリへの手紙。

"Legi, ex quo ad te non scripsi, Eusebii Caesariensis Ecclesiasticam historian Graeca decem ferme diebus. Ita me ita rupuit, ut vix erati

possit. [E]si enim eum alias Latine viderem; minus tamen mihi volu-
ptatis adulteral, quam modo, quam in sua lingua illam legi." *Stu-*
nger, 1977, *op. cit.*, p.138, n.191.

(8) Linder, A., "The Myth of Constantine the Great in the West,"
in *Studi Medievali*, XVI, serie terza, 1975, pp.48-49.

(9) Lieu S., "From History to Legend and Legend to History: The
Medieval and Byzantine Transformation of Constantine's Vita," in
Lieu, S. (eds.), *History, Hagiography and Legend*, New York, 1988,
p.149.

(10) *ibid.*, p.149.

(11) Vegio, M., "De rebus antiquis memorabilibus Basilicae S. Petri
Romae," in *Acta Sanctorum, Junii*, vol.VII, Bruxelles, 1669 (1717),
pp.62-63; Webb, D. M., "The Truth about Constantine: History,
Hagiography and Confusion," in Robins, K., (ed.), *Religion and
Humanism: Papers Read at the Eighteenth Summer Meeting and
the Nineteenth Winter Meeting of the Ecclesiastical History Society*,
Oxford, 1981, p.99.

(12) Vegio, *ibid.*, p.63; Slinger, 1998, *op. cit.*, p.179.

(13) ローマ正統史の「コンスタンティヌス帝の場面」について、エウゼビ
オスの『コンスタンティヌスの生涯』と『聖ルウェスデル伝』及び「ロ
ンスタントゥヌスの寄進状」を考察し文献学的立場から論じている。それ
によれば、「寄進状」は西方世界と教会との密接な関係性を示し、異教徒に
対する「神々」の機能を持っていた。エウゼビオスの描いたコンスタンティヌス
帝は「エウゼビオスの批判にも関わらず「寄進状」が十分に機能していたことを
示す証拠」があり、「エウゼビオス」は「寄進状」の重要性を理解していたと述べてい
る。

Nichols, S. C., "In Hoc Signo Vincis: Constantine, Mother of Harm",
in Lavin, M. A. (ed.), *Piero della Francesca and His Legacy*, 1995,

p.43.

(14) エウゼビオス『教会史』、『秦剛平訳、白土書店、一九八六年、一四二頁。』

(15) 同右、一四五-一四六頁。

(16) "Turcos vicere, non tam ferrum quam fidem hostibus opponentes,
... Nec nova magnificis cael' exemplis (Constantino magno pugnam
tinnenti, signum crucis in caelo monstratum est, et vox divinitus
audita quae dicebat. In hoc Constantine vince." Aeneas Sylvius Pico-
lomini, "Oratio Pii Papae II habita in conventu Mantuano sexto
Calendas Octobris Anno Domini MCCCXLIX," in *Aeneae Sylvii Pico-
loniuae senensis: [...]/ opera quae extant omnia, [...]/ his quoque
accessit gnologia ex omnibus Sylvii operibus collecta, & index rerum
ae verborum omnium copiosissimus*, Frankfurt, 1967, p.509; Calvesi,
op. cit., p.87.

カルヴェジは「カエスタラーノとコンスタンティヌス帝の勝利を重ね合
わせた」の言葉を引用し「エウゼビオスの説教を行った前年の一四五八
年にエウゼビオスを映画制作のためにローマへ召喚していることを示さる「マ
レンツォの壁画のプログラムは直接ローマ教皇庁から指示されたものではな
い」と述べている。

図版出典

図1 Maetzke, A. M. (eds.), *Piero della Francesca The Legend of the
True Cross in the Church of San Francesco in Arezzo*, Milano,
2001.

図2 『世界美術大全集 西洋編 第11巻』小学館、一九九三年。

図3 Walter, C., *The Iconography of Constantine the Great: Em-
peror and Saint with Associated Studies*, Leiden, 2006.

図4 Baldini, U. (a cura di), *Santa Croce: la basilica, le cappelle, i chio-*

stare il museo, Firenze, 1983.

図 658 The Pierpont Morgan Library, *The Staveland Triptych*, Masan
Art and the Legend of the True Cross, New York, 1980.

※本稿は修士論文(一)(一)八年度提出)の論旨に基づいた、早稲田大学美術
史学会総会(一)(一)九年六月)における口頭発表を発展させたものである。